

批林批孔運動と中国の内政 国際問題9月号-1974.09.00

国際問題

第 6 号

批林批孔運動と 中国の内政

1974年9月

国際問題研究所

國際問題研究所

會長 參議員 議員 戶 叶 武

理事 元衆議院議員 稻 村 隆 一

東大教授 衛 藤 藩 吉

元參議院議員 岡 田 宗 司

北方圈調查會幹事 岡 田 安 彦

創価大學教授 權 俊 雄

東京外語大助教授 中 嶋 嶺 雄

事務局長 渡 辺 三 樹 男

監事 戶 叶 勝 朗

大 出 宣 三

批林批孔運動と中国の内政

中 嶋 嶺 雄

顯教的・密教的マスコミ

きょうのテーマは、中国の内政問題、特に最近注目を集めております批林批孔運動というものが、どのような政治構造を保持しているかということを中心に話してみたいと思います。

渡辺さんからは、壁新聞についてもお話しして欲しいという要請がございました。壁新聞はご承知の通り、このところ連続的に出ておまして、一時は七月の初旬ぐらいで下火になるのではないかと一部は推測もありましたけれども、そうではなくてかなり広がっているようであります。特に地方都市——日本の新聞には北京の物しか出ていないわけでございますが——に壁新聞が非常にはんらんしているというところともいわれております。日本大使館あたりも、ある程度はこの問題についてフォローし始めていますようであります。

で、一口に批林批孔運動といいますが、数千年來の中国の伝統思想である孔子批判という問題と、ついこの間まで、文化大革命の時には、毛沢東の後継者であり、最も忠実

な革命の後継者といわれた林彪がいかに卑劣な陰謀家であるかということ批判する運動を結び付けて、現在中国で問題が展開されていること自身が、実はいろいろな問題があるわけでございます。

そういう問題を含みまして、きょうは中国をめぐる、特に内政問題をいろいろお話ししてみたいと思います。その前に、一部では注目されておりますが、このところ中国の陳楚駐日大使が二カ月以上不在でございます。大阪の中国展には帰ってくるであろうと、政府関係者その他だれでも思っていたのですけれども、ついに中国展にも帰ってこなかった。これはやはり注目している材料であります。かつての文化大革命の時に、在外公館の大使がほとんどすべて召還されたと同じような状況、ひいては中国の対外関係あるいは國務院の中に幾つか問題があるのではないかとすることも指摘され得るわけでございます。

そこで、そういう問題をお話する前に、一つの前提といたしまして、壁新聞というものをどう理解するかということから入っていきたいと思うのです。

中国におけるメディア——コミュニケーション構造そのものが、われわれ日本あるいはソ連ともかなり違うわけがございます。その辺の問題を根本的にいっぺん洗っておかないと、現在の壁新聞の政治的な意味あるいは機能というもの

理解できないわけでございます。

実は、中国のコミュニケーションについての研究というのはほとんどなされていないわけで、私も社会学が専門ではございませんので、十分なフォローはできないかもしれませんが、ざっと申し上げますと、中国における社会的コミュニケーションの媒体として、ご承知のように、人民日報が圧倒的な意味を持っているわけでありませう。

最近ではラジオがかなり普及しております。ラジオの普及台数は一九六六年当時約一千万台。最近は二千万台に近いといわれます。北京放送——正確には中央人民放送局といいますが、それでも、そして地方放送局というものがネットされているわけでございます。

こういう人民日報、あるいは北京放送、これが一般的なコミュニケーションの媒体であります。

それから、テレビについて考えてみますと、普及率が非常に限られたものでありまして、ことしの四月現在、いちばん新しい推計で約四十万台ということですので、全く一般的なコミュニケーションとしては、七億、八億の中の四十万ですので、あまり意味を持たない。

そうしますと、やはり何といっても、人民日報および新華社の報道を中心とする北京放送となるわけでございます。これは正統的なメディアです。

このほかに、こういうメディアとしては、ご承知のように、民主諸党派の機関紙である光明日報。人民日報が中国共産党の機関紙であるのに対して、光明日報のほうは民主諸党派の機関紙であるといわれますけれども、実際には、今日、中国の民主諸党派というのは名目的な存在になっておりまして、完全に形骸化しておりますので、ほとんど独自の意味を持たない。ただ、しばしば文化的な面がかつての光明日報が持っていたような色彩を残している。

それから、もう一つは解放軍報という人民解放軍の機関紙があるわけでございます。それと、中国共産党の理論誌である紅旗というものを中心として、正統的なメディアの媒体があるわけです。この中では、何といっても人民日報が中心であると考えていいわけでありませう。

こういうメディアを私は公的なメディアと呼んでいるわけでありまして、この公的なメディアに対して、いわば非公式のメディアがあるわけで、その一つが最近注目を集めている壁新聞——大字報、およびガリ版刷りの小さな小字報というふうに考えていいのではないかと思います。

しかも、人民日報や壁新聞というものは、人の目に一般的に触れるものがございますから、これを私は大きく分類しまして、頭教的なメディアと考えております。

これに対して、中国を理解する時に非常に重要なのは、密

教的なメディアが非常に大きな意味を持つということであり、この密教的なメディアにはどういふものがあるかといふと、一つは林彪事件などで知らされたような、党内の秘密文献、この中には五七一工程紀要といわれる、林彪事件の真相が書かれているといわれるようなもの、あるいは最近でも大体二十号ぐらいまで、ことし一月から出ている、中国共産党中央発第何号通達というものです、こういうものを同時に考えてみる必要があるわけでございます。

それから、この密教的なメディアも二つに分けられるわけです。そういう通達に類するものと、内部文献ではあるけれども、一種の新聞、雑誌のスタイルをとっている、限られたサーキュレーションのマスメディアとしての「参考消息」「参考資料」それから「極秘」という、まさに極秘というものですけれども、こういうものがあるわけでございます。

この参考消息、参考資料、極秘というのはクラス分けができるわけにして、極秘というものが最も限られたサーキュレーションのものであって、その次が参考資料、それから参考消息というのは、大体十八級以上の幹部といふので、日本の官僚機構でいいますと、課長級以上——最近いろいろ説がありますが、参考消息はもっと広範に見られるということがいわれております。

こういうものを総体として中国のコミュニケーションとい

うものが成り立っていると考えることが必要であらうと思ひます。その中で壁新聞というものも位置付けてみなければいけないのです。それをもう少しくわしくご説明いたしますけれども、中国の社会的コミュニケーションにおける顕教性と密教性を理解しておくことが必要であります。

二二〇名で一部の人民日報

人民日報がこういつているから、中国の対外対策はこうであるというふうに、即事的に判断することはできないわけがあります。たとえば、人民日報は確かに日本軍国主義像ということを数年前は盛んに唱えておりました。ところが、党内の密教的なメディアである参考消息などを見ますと、実は自衛隊員の募集をしても、隊員がほとんど集まらない、若者はあまり自衛隊に関心がないということまで出ているわけです。

ですから、そういうことを考えて中国というものを見る必要があるし、中国の対外政策がしばしば非常に公式的なことを言いながら、実は非常に、ある意味でリアリティのある、現実的な外交政策を展開しているカギもそこにあるわけでございます。

そこで、初めに戻りまして、人民日報の発行部数はどのくらいあるのだろうか。こういうことは大事なことのようで、意外に日本の新聞もほとんど報じませんし、ほとんど知られ

ていない。年鑑類を見ても、正確な数字は載っていないわけ
でございます。私がいろいろ調べたところによりますと、いち
ばん新しい数字は一九七二年の十一月、人民日報の国際部主
任陳俊という編集者が、ヒューム・イギリス外相訪中記者団
に明らかにした当時の発行部数は三百四十万部であるという
ことでした。

この数字を基礎に算出いたしますと、中国共産党員という
のは、去年の十全大会で、二千八百万といわれておりますの
で、約八名の党員について一部の人民日報が配られるという
ことです。社会党の社会新報ほどのくらの普及率か私知り
ませんけれども、中国共産党員内でも人民日報を見るのは八
名に一人である。それから、これを全人口についてみますと
ご承知のように、中国の人口統計というのは、公式な統計は
一九五四年以来まさに、二十年間発表されてないわけです。か
ら、推定値に頼る以外ないわけですが、仮に七億五千万とい
う平均推定値を取りますと、私の計算では、中国には約二十
七人に一人の割合で共産党員が存在し、それらの共産党員の
約八名に一部の割合で人民日報が配布ないしは購読されてい
る。全人口に対してみると、約二百二十名に対して人民日報
が一部ということ、つまり一部の人民日報を二百二十名で読
むという計算になるわけでございます。

ここに、壁新聞というものが大きな意味を持つ一つの伏線

的な問題提起をしたいわけでございますが、それは後にしまし
て、中国において唯一の正統的なメディアである人民日報で
さえも実は二百二十名に一名しか行き渡らないということに
なりますと、壁新聞というのは非常に大きな意味を持つ、あ
るいはその他の党内の伝達、口コミというものが非常に大き
な意味を持つということを理解しておく必要があるのではな
いか、これがまず第一点です。

それから、第二点は壁新聞があればほどの人気を博するとい
うカギは、中国社会というものが一般的に非常に非情報的な
性格を持っているということです。ということは、同時にこ
の中国社会の底辺におけるモビリティが非常に低いというこ
とを知っておく必要があるのではないかと思えます。

一九六二年——ちょうどいまから十二年ぐらい前ですが—
—有名な経済学者のグンナー・ミューダールの息子のヤン・
ミューダールが、延安近郊の農村に一月以上滞在したこと
があります。この息子はスウェーデン人であるためにいろん
な特権が与えられて、社会主義中国の農村に一月以上滞在
して、しかも実態報告——フィールド・サーベイをやりまし
て、邦訳では中央公論から「中国農村からの報告」という非
常に感動的な報告が出ております。

これをお読みいただくかわかりませんが、延安近郊の柳林と
いう、彼のいた村の場合は村民が二百十二名おります。その

中で北京へ行ったことのあるものはただ一人、村の党書記長だけなのです。延安というのは、ご承知のように陝西省でありますので、陝西省の省都である西安に行ったことがあるものは村中で二人、書記長を含めて二人です。ご承知のように、延安というのは老解放区でありまして、中国全体の中では割合に開けたところであるにもかかわらず、二百十二名の村人の中で北京へ行ったことのあるものは村の党書記長一人だけということですよ。

たとえだ、日本の山梨県のある農村あたりで——ちょうどそのぐらいに当ると思いますが——村中で東京へ行ったものは一人ということは全くないわけでございまして、こういう、いわば中国社会のモビリティの低さということがわかります。

それから、中国の民衆は隣県へ行く場合に、すべて機関に申請して、通行証を入手しなければなりません。ご承知のように中国の県というのは日本の県よりかなり小さいわけで、日本の郡ぐらいの大きさです。この通行証を得るということは、すべて行く理由その他を申告いたしまして、党委員会——今日では革命委員会がそれに当たっていると思えます——の審査を経なければなりません。そういうことをするということは、一般民衆には負担の多いこととございまして、そういうことを考えても、このモビリティの低さということは証明

されるわけでございます。

ということは、中国におけるコミュニケーションの受け手の側に極度の非情報性というものが存在しているということと、そのような非情報性ということを基礎にして党の政治指導が貫徹するという、一種の特殊なコミュニケーションの体制の中でこそ、まさに密教的なメディアというものが非常に大きな意味を持つということとでございます。

その密教的なメディアがどういう意味を持つかということ、アポロ11号の月世界到着と、ベトナム和平の中国における報道を見てみたいと思えます。

ご承知のように、今日の中国は、人民日報、北京放送ともアポロ11号が月世界へ到着したということは報じていないわけでございます。でありますから、民衆はそれを知らされていない。しかしながら、だからといって、中国の幹部がそれを知らないかという点、決してそうではないわけでございます。幹部には、さっき言ったような、参考消息などを通じて、すべてそのことは知らされているわけでございます。

この点について、人民日報の国際部主任は、どう言っているかというと、「私たちの考えでは、地球上にまだまだ解決すべき問題がたくさんあると思えます。私たちとしては、月での出来事より、地球上の事件に読者の関心があると思っております」という弁明をして、アポロを報道しないことを正統

化しているわけでございます。

それじゃ、地球上の出来事がすべて報道されるかというと、決してそうじゃなく、今日林彪事件といわれておりますが、あれほど批林批孔がいわれておりながら、林彪事件そのものが人民日報で伝えられたことは一度もない。それはすべて密教的なメディア——通達の中で伝えられているわけでございます。

“左”からの國務院批判

それから、ご承知のように、中国はベトナム戦争の当初から中期にかけてまして、徹底抗戦の立場をほめかしておりました。そういう中国の立場からすると、パリでベトナム和平の会談が開かれるということは非常にまずいことになるわけでございます。そのために一九六八年の五月に初めて例のパリ会談が持たれたのですが、このことを中国が報道したのは約一年半後の六九年十月になってからでございます。しかも、その報道の仕方、ベトナム問題に関するニクソン演説を非難した北ベトナム政府と南ベトナム革命臨時政府の声明を報道した際に、従来はパリ会談に関する箇所は全部カットして報道していたのを、削除することをやめたという、非常に消極的な報じ方によって報道しているという問題がある。こういうふうにご承知と、中国におけるコミュニケーション

ーションというものは非常に特殊な体質を持っているということがおわかりになるのではないかと思います。そして、中国のマスメディアにおいてははいわゆる三面記事的な社会面というのには一般にはないわけでございます。しかも、これは、私の考え方ですが、中国人ほど三面記事的な社会面に興味を持つ民族的な特性を本来持っている民族はない。そうしますと、そういう中国人の特性からしましても、当然の社会的な通念からしても、コミュニケーションの大きな断絶というものがあるわけで、この断絶こそ、文化大革命の時期、そして今回の批林批孔運動の中で、壁新聞というものが認識される大きな要因ではないかと私は考えております。

壁新聞というのは、言うまでもなく、二つの機能がございます。一つは事実暴露という機能であり、もう一つは意見表明という機能でございます。こういう二つの機能を持った壁新聞が非常にはんらんいたしまして、それは、文革の時も今回も、政治闘争の一環として意味を持つわけでございますが、実は先ほど言いましたように、身近な工場や党委員会で幹部が悪いことをした、最近では女性問題など、それから賄賂を取ったとか、そういうことが暴露されておりますが、そういうことを含めて、三面記事的なニュースがないだけに、壁新聞でそういうものがあらわれた時に、大衆を熱狂させるという問題があるように思われるわけでございます。

ということとは、中国の非情報的な社会の中でつづいてきた、ニュースや情報に対する潜在的な欲求不満が一挙に爆發する。そういうものとして壁新聞が位置付けられるところにあるわけでございます。ですから、逆に言いますと、情報を持っていないもの、つまり幹部と、情報を持っていないもの、情報を独占しているものと独占していないものとの間の断絶、それに対する大衆の反逆というふうにも言えるのではないかと思います。

私も文化大革命の時期に中国に行つて感じたのですが、それほど紅衛兵が喜々として北京へ北京へと行くのは、一般には、北京に行かれるなんてことは、一生に一度あるかないかということでありますから、それを毛沢東がただで、革命のためならだれでもいいから北京へ来いと言つたので紅衛兵たちは喜んだわけです。それは、先ほど言つたような、社会的性格から導かれるのではないかと思います。同じように、壁新聞が増えるということもそこから出てくるわけでございます。

こういう、中国のコミュニケーション構造というものをうまく、非常に巧みに政治に利用しているのが、毛沢東の政治的な技術、テクニクでありまして、ここに注目しておく必要があると思います。

参考までに、さっきの参考消息について申し上げますと、

参考消息というのは、幹部の新聞でございますので、幹部は状況をリアルに知らなければいけない、そうであるがゆえに、たとえば台湾の中央通信社のニュースさえ幹部新聞には出るわけです。一般の者には台湾のことは全く報道されないわけですが、台湾の経済成長はこれほど高いという数字まで幹部新聞には出る。そういうことをわれわれは知っておく必要があるのではないかと思います。

そういう状況の中で、今回の批林批孔運動というものを見てみますと、やはり幾つかの問題点があるように思います。

その一つは文化大革命以来、幹部が再び特権化してきた。つまり、文革の精神が形骸化してきて、特に革命委員会の幹部が横暴になつてきた、あるいは会議をほとんど開かないという批判。あるいは、金侯というペン・ネームの、いわばドンキホーテみたいな面白い人物が何回も壁新聞で言っているのを見ましても、様々な欲求不満が出ておるわけでございます。

しかしながら、こういうふうに考えますと、中国における壁新聞は、言論の自由という問題と関連して、積極的に評価され得ると考える向きもあるわけですが、私は必ずしもそうではない、実はそういうことを含めて、毛沢東の政治指導は貫徹しているわけです。かつて、紅衛兵運動が盛んだった時に、初めて壁新聞を出した北京大学の女の璉元梓などという先生が盛んに持ち上げられました。しかしながら、やがて紅

衛兵運動が不必要になると、彼女は、失脚させられております。今回も聶元梓を失脚させたのはけしからんという壁新聞が出ているわけです。そういうことを含めて、常に大衆の積極性ということを十分意識しながらも、その背後には政治の赤い糸が太く結ばれていると見ざるを得ないわけであります。

今回の壁新聞には、いろいろの雑多な問題がございますけれども、一つの傾向は、文化大革命への回帰、あるいは文革路線の形骸化に対する批判というものが特徴づけられます。いわば、左からの批判と考えていいのではないかと思えます。

それから、二番目の特徴は、党委員会ではなくて、革命委員会が批判されているということでございます。

今回名指しで批判された革命委員会の幹部は、たとえば華国鋒という湖南省の革命委員会主任。同じ湖南省では、楊大易をはじめ革命委員会幹部がたくさん批判されています。黒竜江省あたりをみますと、汪家道、劉光濤という主任、副主任が批判されました。北京市委員会のことについては日本の新聞も報じておりました。そのほか、陝西省、武漢市、江西省、雲南省など様々なところで革命委員会幹部が批判されているわけでございます。

革命委員会幹部批判が目立つということは、先ほど言いま

したように、革命委員会の幹部の特権化とか、あるいは、文革精神を形骸化させているとか、いろんな批判なのです。革命委員会というのは、文化大革命の奪権闘争の過程でできた新しい行政機関としての権力機構でございますので、革命委員会批判というのは、行政機関に対する批判というふうに考えていいわけでございます。ということは、最高行政機関である國務院に対する批判ということを含意しているのではないかと考えざるを得ない。かつて文化大革命の時に毛沢東は、國務院に対する批判が十分ではない、國務院はいっぱい問題がある、もう少し國務院を批判せよということをおっしゃりましたけれども、どうも最近の一連の動きというのは、國務院に対する批判ということの意味しているのではないかと思うわけでございます。

兵營国家化図った林彪

この点は、実は文革の時とかなり違うわけでございます。文革の時は、党に対する批判、つまり党を破壊せよ、そのところが革命なんだという、実権派打倒の奪権闘争だったので、今回の場合には、國務院批判ということが注目されるわけです。

未確認情報ですが、ほぼ地方放送などを含めて考えると確かだと思われるのは、現在中国には「批林批孔弁公室」とい

うものが設けられまして、批林批孔運動を指導している。そして、この批林批孔弁公室というのは、かつての文化大革命の時の文革小組と同じように、江青夫人がその責任者であり、張春橋、姚文元という文革ラディカル——宮廷派とかいえる呼び方はありますけれども、文革派が副主任になっておる。それから王洪文が顧問になっているという情報があるわけでございます。

もしも、こういうふうに考えてまいりますと、やはり今回の一連の批林批孔運動というのは、ある意味では、國務院そして周恩来批判を意味するのではないかと考えざるを得ないわけでございます。

そこで、問題は中国の行政官庁がどういうふうになっているのかまだまださっぱりわからないわけです。國務院のポスト、つまり大臣が一体何人いるのか、それさえもはっきりわからないわけでございます。外交部のように明らかにしている部署もあるわけですが、依然として非常に多くの部署が固まっています。

それから、人民解放軍の総参謀長も、一応憲法の建て前によれば、周恩来総理も、全国人民代表大会の合意によって選出された国家主席が國務院総理を任命することになっておりますから、そういう、総理以下國務院の閣僚の任期はとっくに切れているわけでございます。そういう制度的な裏付けの

ない状況が続くことになるわけでございます。

なぜ中国は、人民代表大会を開かないのか。人民代表大会は、憲法によれば毎年開かなければいけないわけで、日本の国会にあたる一院制の議会でございます。そこで國務院の閣僚のポストを五年に一べんは選出し直す。あるいは、毎年毎年国家予算と決算を審議し承認する。それから、外国と締結した条約などはそこで批准することが必要になるわけで、そういうことを中国は一切やっていないわけです。ですから、日中航空協定にしても、今後予想される平和条約にしても、本来日本の国会では批准するけれども、中国の国会で批准したということ聞いたことがないわけで、そういう政治的空白状況の中ですべてが行われているわけでございます。依然として、そういう状況が続いていることからしても、やはり現在の中国はかなり大きな問題が存在していると考えざるを得ないわけでございます。

そこで、これからは私の仮説になるわけですが、なぜこういう状況が続くのか。たとえば、最近中国で言われていることに、「公明正大でなければいけない」「陰謀術策を弄してはいけない」ということがあります。これは、すべて林彪を指し、林彪も孔子も陰謀家であって、全く公明正大ではなかったということが言われるわけですが、林彪は過去の人物ですし、孔子は、思想としては問題があったかもしれま

せんが、やはり、現実の政治闘争の一環として批林批孔運動が位置づけられている状況をみますと、現在の状況の中で問題を考えていく必要があるのではないかと思えます。

そこで、私はこういう仮説を持っているわけです。つまり林彪事件というものが非常に衝動的な事件であった。毛沢東と林彪がスクラムを組んで天安門の上で語録を振っている姿が大衆には伝達されているわけです。その林彪がこともあろうに、毛沢東暗殺を企てた最悪の反革命であるということですね。これは大変な事件である。そうしますと、その事件を正当化する——つまり、林彪がいかに悪者であるかということとを正当化していかなければいけないために、幾つかの無理が生じている。そして、それほどの陰謀家であり、卑劣な反逆者を党副主席にまでした中国共産党全体の責任はどうか、その最高責任者である毛沢東の責任はどうかということにもなりかねないわけでございます。そういう無理な状況をいま中国は論理化しなければいけない。その一環として批林批孔運動というものが出てきたように思うのです。

ということとは、結局林彪事件なのですが、この事件というのは、実は周恩来——つまり行政官僚対軍の熾烈な闘争であったのではないかというのが私の仮説なのです。文革によって軍が圧倒的な優位を占めたわけで、いわば中国は兵営体制になったわけでございます。当時兵営体制——ギャリソン・

ステイトなんていうことを言うと、日本でもずいぶんおしかりを受けたのですけれども、中国がいま言っていることは、林彪はまさに中国を軍事国家化しようとした、兵営国家化しようとしたと言っているわけですから、私の仮説が正しかったわけです。

文革は、党内の少数派であった毛沢東が軍の力を頼りに——つまり、林彪が全面的に人民解放軍を率いまして、毛沢東をバックアップしたがゆえに、毛沢東の勝利に帰したわけでございます。軍が奪権闘争に大きな地位を占めた結果、軍は党の中においても大きな優位を占めたわけでございます。革命委員会、そして党委員会を見ましても圧倒的な数の軍の優位でございます。九全大会以後の時期を見てみますと、各級レベルの第一書記の九十数パーセントが軍人であるという時期がありましたから、ある意味では、党官僚あるいは行政官僚あるいは行政官僚にとっては非常に脅威になってきていたわけでございます。

そこへ六九年の中ソ対立というものが大きく作用いたしました。軍は、六九年の新強省を中心とする中ソ戦争の危機に際して、非常にソ連の脅威を感じざるを得なくなりました。そのためにはもっと軍事予算を増大させ、軍の力を強めることによって、対ソ対決を貫こうという姿勢を取り続けたように思うのです。

今日、林彪はソ連に通じていたスパイであるというようなことを言われますが、かつての林彪の一九六五年の「人民戦争の勝利万歳」という論文、それから六九年の九全大会の対ソ徹底抗戦を呼びかけた「戦争に備え災害に備え」という演説。そして、林彪だけならともかく、失脚した黄永勝総参謀長がその後もずっと一貫して主張していたような、米中接近はあり得ないという主張——対ソ徹底対決、帝国主義との妥協もソ連修正主義との妥協もあり得ないという姿勢を考えますと、むしろ軍は一貫して対ソ強硬路線であったのではないかと思うのです。

これに対して、そのような軍の暴走というものが、政治勢力としても肥大化していることを含め、党官僚なり行政官僚には非常に脅威になっている。そこへもってきて、軍がますます暴走しようとしていることは、周恩来なり、そして毛沢東にとっても脅威になってくる。そして周恩来としては、米ソ二正面作戦を避ける意味からも、六九年の後半以降アメリカの送ったシグナルを受け入れまして、米中接近に走っていく。こういう状況の中で、周恩来は中ソ危機をコスイギンとの会談によって凍結させまして、外交交渉に乗せていくわけです。むしろ、周恩来のほうが対ソ関係にしても、米中関係にしても現実主義というか、融和的な方向を出していたわけでありませう。

毛沢東下の非毛沢東化

その他陳伯達の失脚もありますけれども、こういう内外情勢を含めまして、その極限に起こったのが林彪事件ではなかったか。そうしますと、林彪事件というのは一種の予防クーデターとして行われたものであって、私の仮説が正しいとすれば、林彪は北京で殺されている。そして、林彪、総参謀長以下、軍人のほとんどが北京で処理されたか、今日生存しているにしても軟禁状況にあるのではないかという気がするのです。

モンゴルのウンデルハンで死んだという中国の主張は中国側のみが主張しているわけでございます。ソ連大使館もモンゴル当局も否定しておる。最近のソ連の論調も明らかに私のいまの説を強調し始めているわけでございます。

まあ五七一工程紀要という林彪事件の真相はあまりにもチャチでありますし、林彪ほどの者が、あるいは林彪だけならともかく、黄永勝、それから陸海空の総司令全部が失脚したわけですから、当時の軍人があれほどチャチなことでも毛沢東暗殺を計画して、それが露見するようなことはするはずがない。私の仮説が正しくないにしても、それに近いような状況が中国内部にあったのではないかと思えます。

そのあげくの米中接近であり、ニクソンとの首脳会談であ

ただけに、あのころは周恩来にとってもまさに乗るかそるかの大きな危機をくぐり抜けてきた状況ではなかったかと思えます。

そういうふうと考えてみますと、周恩来というのは確かに中国を長期的に見て、常に国家的使命感に立脚する人物だと思えますので、林彪型の冒険主義をも克服しましたし、中国革命の過程でも一貫して毛沢東の政治の尻ぬぐいをしてきたわけですから、内心非常に深いところで、毛沢東の文革路線ではとてもだめなのだということをよく知っていたわけでありませう。

なし崩し的に旧幹部の復権を図り、いま批判されているような脱文革という方向を出していく。対外的には、中国をめぐる国際環境が大きく変化していく中で、国家外交といわれる現実主義外交に転換していく。このイニシアチブを取ったのはやはり周恩来だというふうを考えざるを得ないわけでありませう。このことは、内政的には脱文革、対外的には現実主義外交として、中国が新しい転換点に立ったことを示しているわけで、ちょうど二、三年前がそういう時期であつたらうと思えます。

そして、周恩来は非常に深いところで毛沢東体制下の非毛沢東化という戦略を立てたのではないか。つまり、毛沢東にあからさまに逆らうということがいかに大きな危険を伴うか

ということとは、彼自身も劉少奇の例も、林彪の例を見て知っているわけでありませうから、毛沢東の権威というものを、表面的にも立てながら、実質的に非毛沢東化を図ることによって毛沢東死後の中国を開かれた中国に、中国自身が国際化し得るような状況に対処していく。具体的には、日本国交回復の背景に見られたような、工業化を中心とする経済建設を中心に持っていくということも含まれるわけでありませう。

こういう周恩来の非常に遠大な戦略というものが、つい一、二年前、周恩来のイニシアチブを内外に示し、脚光を集めたわけでありませう。ところが、その過程で林彪事件が起こりまして、これが非常に衝動的であつただけに、これをどういうふうに大衆に伝達するかという問題が出てきたわけでありませう。

最近でも一部には、人民解放軍の中に「林彪は無実である。林彪將軍のどこが間違つていたのか」という文書が出ていふという情報もあるわけです。確かに、あれほど林彪林彪といつていたのを、これほどの陰謀家であるというにはいろんな説明が必要になるわけで、その過程で出てきたのが、一つは毛沢東が江青に与えた手紙というやつです。

これも、まさにさっき言った密着的なメディアなので、けれども、これはある意味で毛沢東が責任を回避するもので、非常に大衆に伝播されたといわれています。これは毛沢東が

一九六六年、文革の始まった当初、旅先から自分の奥さんである江青夫人に与えた手紙です。この中で毛沢東は「林彪というものは、もしかすると、非常に危ない人物であるような気がする。非常に自己顕示欲が強くて、お前は林彪に注意すべきだ」ということをちょっとほめかしている私信でございます。

それがいま伝えられたということは、ある意味で、毛沢東は初めから林彪の陰謀性というものに気がついていたのだということ、あるいは、そのことによって毛沢東自身の責任を回避せざるを得ないのかもしれない。

しかしながら、こういうことを毛沢東が言わざる得ないということとは、林彪事件のあとで顕著になってきた脱文革という潮流の中で、文革派というものがかなり窮地に陥れられまして、状況は周恩来などのほうに有利になって、そちらのほうが潮流になってきたと考えざるを得ません。

その潮流の中で、もう一つ周恩来は、例の五七一工程紀要を大衆に伝達したわけでございます。これは、周恩来自身が十全大会の公式の席で言っているわけですが、林彪事件については五七一工程紀要を広く伝播してあるので、ここでくわしく説明するまでもなく、中国の大衆はすべてそれを知っていると言っているわけです。そして、五七一工程紀要というものには実は偽物ではないかといわれていたのですが、十全大会によってそれが本物だということが明らかにになって、いま

われわれがそれを翻訳でも見ることが出来るわけです。

五七一工程紀要というのは、ご承知のように、毛沢東をB52になぞらえまして、いろいろと陰謀計画を書いているのですが、要点は二つあります。

その一つの要点は、毛沢東が現代の専制暴君であるということ、これが一つのポイント。もう一つは、毛沢東は現代のマルクス・レーニン主義の衣をかぶっているけれども、彼はまさに孔孟の道を歩むものであるという言葉があるわけです。この二つが実は五七一工程紀要のポイントではないかと思っております。

これが、さっき言った密教的メディアの中で大衆に完全に流布されている。香港あたりに逃げてきた人たちの情報をどの程度信用していいかという問題もありますけれども、かなり信用できる難民の意見によりまして、五七一工程紀要の口コミ伝達時には、当初はみんな窓を閉めて、震えるような気持ちで伝達されたという状況だそうです。それは林彪事件を考えると確かにそうなのです。

この二つの、毛沢東にとってトゲを含む言葉が入っている五七一工程紀要が周恩来の責任において流布されたということとは、考えてみますと、周恩来の深謀遠慮から発した、深い戦略の一環として、中国の民衆のだれかが心の隅で感じながら口にできない言葉——つまり、毛沢東はある意味では始皇

帝ではないか、彼は孔孟の道を歩む人物で、マルクス・レーニン主義ではないのじゃないかということやを伝達した責任は大変なことなのです。

それが十全大会の前、去年のいまごろは五七一工程紀要が流布されていたわけでございます。ところが、それ以後状況がかなり複雑になってまいりまして、十全大会の周恩来の演説を見ますと、いかにも周恩来らしからぬポーズ——非常に左翼的な姿勢を強調しているわけです。これを王洪文の演説と比べてみるとよくわかるのですけれども、正洪文の演説というものはある意味で非常にはっきりしています。反潮流を鼓吹している。潮流に逆らうことが革命である。反潮流のためには、殺害されることを恐れず、離婚されることを恐れず、免職になることを恐れずというような言葉がたくさんあるわけです。それを恐れず反潮流になることが真の共産主義者である。

周恩来はこの反潮流ということだけを言っておりませんが、そのひとつはいかにもポーズとして言ったように見えるわけでございます。

十全大会の周恩来報告と、王洪文報告は実は非常に大きな対立の産物ではなかったか。

周恩来がそういう形で進めてきた、毛沢東体制下の非毛沢東化戦略がつまりき始めた。遠望深慮が露顕したと考へざる

を得ないわけです。で、周恩来は左翼的なポーズを取らざるを得なかったのではないかと思うのです。

そのころ、十全大会の直前——八月七日ですが、孔子批判の楊栄国という中山大学の先生の論文が出版して、ちょうど十全大会の前後に孔子批判が行われ始める。

孔孟を引用した毛沢東

それから、孔子批判の中で重要なことは、始皇帝像というものやを転換すること、従来専制暴君であるといわれてきた始皇帝のイメージを革命君主であるというふうやに転換していった。つまり、五七一工程紀要の中で、始皇帝は専制暴君であり、毛沢東は始皇帝だというわけですから、毛沢東ないし文革派にとってはとんでもないことになるわけです。そのために必要なのは始皇帝のイメージチェンジで、非常に無理な形で始皇帝が革命君主にデッチ上げられました。

そして、一方では、毛沢東みずからの発動による孔子批判運動によって、毛沢東は孔孟の道を歩むものではない、毛沢東こそ孔子批判をやってきているのだということやを言っている必要があったわけです。

毛沢東選集をこ覧になるとよくわかりますけれども、毛沢東は孔子をたくさん引用しております。孟子も引用しております。特に孟子が多いですね。それから、論語のいちばん初

めの有名な言葉なども毛沢東は何回も引用しております。けれども、ついこの間の人民日報に出ていた記事によりますと毛沢東はいかに孔子を批判したかという、毛沢東の孔子批判の語録だけが並んでおりまして、毛沢東が孔子をたたえていることは全部除いております。未公開資料の中で、文革の渦中でも、紅衛兵たちに向って「お前たちはもっと孔子を読まなきゃいけない。孔子というのは確かに貴族階級の出身であったけれども、彼は民衆の中に入って行って琴をかなで、歌を歌い、庶民と一緒にダイアログをやった。中国における対話の先駆である」ということを言っております。そういうことはいまになって、全部隠されているわけでございます。実は批林批孔運動というのは非常に無理な運動でして、こういう現在の中国の中に渦巻く潮流というものを背景にした政治的な構造を持っているのではないかというのが私の仮説なのです。

そこで、最後にその仮説を検証するために、最近の一連の人民日報や紅旗を見てみたいと思います。

疑問に満ちた周恩来批判

そうしますと、どう見てもいま言ったような周恩来批判と目されるものが多いわけでございます。ただ、結論的に申し上げますと、いまの状況はかなり拮抗しておりますので、中

にはむしろ周恩来を擁護したような論文も出ています。たとえば、中国で二年前に出た「アンチ・デューリング論をいかに学ぶか」という論文などでは、かつてスターリン批判直後にわれわれが受けたような瑞々しさと思われる、科学的な思考方法の重要性を提起しているわけです。そして、紅旗や人民日報の中にも、「一部の者は中国の二千年来の階級闘争史を政変陰謀史に変えようとしている。勝手に歴史を変えようとしている」ということを言っております。批林批孔運動の無理なこじ付けについての批判も混在しているわけであります。

しかしながら、それはあくまでも少数になりつつあるわけです。最近の潮流は、脱文革が潮流であったわけですが、それが反潮流、反復辟のほうに潮流になりまして、どう見ても周恩来批判と思われるものが多いわけです。

たとえば、紅旗第5号の余凡論文というのは「林彪の反革命策略の破産、一冊の黒いノートを批判する」というもので、林彪が黒いノートを書いていたということなのですが、中庸の道を非常に批判している。それから、合理主義を批判している。しかも、林彪は表面上は左翼高姿勢を装った、しかし実際には徹頭徹尾の極右派である。そして、大衆の世論を作り出すために、世論に迎合し、大多数と団結するということを書いて政策的には中庸の道を歩むようなことを言い出

そこがおかしいと思うんですね。

B 周恩来に替わって出てきた鄧小平は周恩来の子分じゃないですか。

中嶋 そうは言えないわけですし、鄧小平というのは大変な経歴の持ち主です。鄧小平がクロージアアップされたのは例の高岡事件で、五年のスターリン批判のあと、八全大会で脚光を浴びてきたわけです。その後鄧小平はご承知のように実権派のナンバー2と言われて批判されたわけです。しかしながら、鄧小平にしますと、当時一つのメルクマールは、六年に日本共産党が毛沢東との会談によって決裂する事件でございました。そのころは劉少奇、鄧小平、それから北京市長の彭真などと日本共産党の宮本代表団は一致しまして、共同声明を発表するところまで行ったわけです。そこで、毛沢東がこれはけしからぬと行って決裂するわけです。

そのころまでは周恩来は実権派に近かったわけです。にもかかわらず、文革で周恩来はどちらかにかけたわけです。そして、毛沢東にかけたからには全面的に忠誠を誓った。一方、鄧小平が批判されていく中で、周恩来は鄧小平を決してかばいませんでした。そのことを鄧小平は決して忘れないと思うんです。

一方において、毛沢東や江青から鄧小平は名指しで批判されているわけです。そのことも決して忘れていない。ですか

ら、この鄧小平が復権したのは、脱文革、旧幹部の復権という潮流に乗って復権したのですが、一たび復権してしまうとそう簡単に周恩来の子分というわけにはいかない。やっぱり、彼は第三のエースとして動き得る余地を持っている人物だと思えます。そういう意味で鄧小平というのはキャストイング・ボートを握っているのではないかと思えます。

D この一連の動きの中で江青の位置づけはどうなるのかな。

中嶋 かなりその辺が重要なんです。重要であるがゆえに中国の政治ドラマというのは宮廷劇みたくならざるを得ないんですけれども、やはり江青夫人は非常に大きな意味を持っていると思えます。

最近、初瀾(しよらん)というペンネームは江青じゃないかといわれておりますけれども、ペーターペンやシューベルトを批判しているわけです。文芸作品に再び文革的な色彩を出してきた。どうも毛沢東は自分の奥さんである江青をあとに置きたいような感じなんですね。

D 中国の宮廷革命の中にはいつも女性が重要な役割を果たしている。このことを除いては中国の歴史は語れないという面があるので、やっぱり江青の位置づけも必要ではないかと思えます。

それから、あなたの密教的なメディアと顕教的メディアと

二つに分けて、中国の動きを分析してみた方法というのは非常に参考になると思うのです。やっぱり日本の政治の中に、非常にチャーマン的な、テンション民族的な面があると同じく、中国という国は昔から二つの面が文化の中で綾になっている。

たとえば、中国共産党が誕生する前、北京大学における陳独秀とマルキシストの李大釗なんかののろしは孔子批判から始まっている。このことは、やっぱり共通な基盤の上で、毛沢東、周恩来の一九二九年から三十年ごろ、五四運動に行く流れだったと思いますね。

あなたが指摘しているように、毛沢東は詩経の研究をやっている、古典研究じゃあれぐらいの研究者はない。それから、詩からいっても、楚辞なんかに表れているように、古いスタイルを好んで、中国の言葉の革命が進行している際に、そういう特殊な、古い文字をその中に生かしている。あの中には、湖南を中心とする一つの文化と、山東——昔の斉の国を中心とする文化、宋の国を中心とする文化が中国にある。

始皇帝の天下統一の時に滅ぼされて、最後に残ったのが山東の斉の国と宋の国であって、あのかを比較しながら、離騷の詩に含まれている悲歌なんかも毛沢東は受け継いでいる。

そこから辺に、山東の文化人の考える考え方と、楊子江の湖南の人たちのもの考え方というのは非常に対照的です。

昔、私は日本の漢学者で湖南学派の松崎鶴雄という人に北京で会ったことがあります。この人は長谷川如是観よりも、中国に対する研究の点じゃはるかに面白い研究をした人です。

あなたが分類した、頭教的、密教的という中に、いまの文化大革命の陰湿なものが表れている。裏と表の二つの面、盾の両面から見なくちゃならないという中国の反語的な面があるでしょう。たとえば、秦の始皇帝の側近であった李斯——でしたか——の馬・鹿問答のように、馬と言ったら危ない場合には馬を鹿と言わなくちゃならない。私はいつか「馬鹿語録」というエッセイを書きたいと思っているけれども、中国人に特有の一つのものがありませんな。

D 梅原猛君が法隆寺論の中で、「隠された十字架」という形で、哲学的な推理方式で聖徳太子一族の怨霊の追求をみごとにやった。飛鳥の時代の何ともいえない陰湿な時代に対して、いままでの歴史学者がいろいろな問題を提示しているけれども分析が大胆でなかったのに、哲学者の領域から日本の歴史学者のマンネリを打破して問題を提示した。それと同じように、ちょっと立ち入ることができないような、何だか霧の中に入ったような中国問題に対して、あなたの考えが当たるか当たらぬかというのじゃなくて、中国の思想を見るのに、もの見方、発想の転換を与えられた点で非常に参考になった。

C 毛沢東は健康ですか。

中嶋 毛沢東は割合に健康じゃないかという気がするのですね。周恩来はかなり無理をしてきた。実は田中さんが向こうに行く時に行った、警備担当のある官僚で私たまたま個人的に知っている人がありまして、その人が注射をしている現場を見たんですね。注射で持たしているのですから……。

C それにしても、いままでの分析をお聞きすると、やっぱり必然の帰結は、周恩来というナンバー2がねらわれているなということですね。いろんなことを言っているけれども、孔家の次男坊というのは明瞭に周恩来を指しているのでしょう。しゃべっておって、文は書かないというのはまさに周恩来以外ないわけだな。

B 彼は失脚しますか。

D 潮流としてはやっぱり周恩来の方向へ向っている。脱イデオロギーの時代というのが世界の潮流になっている。

マルクス・エンゲルス以後にはイデオロギーというのが科学的社会主義の名で呼ばれているけれども、実際は宗教に近いような権威主義的なイデオロギー、科学の名において権威主義を押しつけているという時に、脱イデオロギーというのはイデオロギーをなくしろというのじゃないけれども、そういう公式主義から脱出しないと、もっと自由な観点でものを見ないと、われわれの道はないのだということを大衆全体が

受け止めてきた。この大衆の流れ、潮流に政治も乗らなければならぬところへヨーロッパ社会も、日本もこれから変わってくるのじゃないかと思って政治に失望しないのですかね。そういう点において、周恩来がいろんな点で苦勞しても私はあの方向をそうゆがめることはできないのじゃないかなと思いますな。

C にもかかわらず、どうも病院に入った、病氣だといったり、そうではないといってみたり。しかしながら、表舞台に出てこないといつところをみると、林彪のように殺されはしないけれども、存在しておりながら存在しないと同じようなところへ持っていかれる可能性はあるのじゃないですか。

A ですから、中嶋さんのお話の中に出てましたが、やっぱり毛周以後の時代をみんなが意識していると思うのですよ。毛も周も早晚死ぬ人ですよ——そう遠くない早晚。ですから、みんなが、毛を倒そうとか、周を陥れようとかじゃなくて、どうやったら自分のところにくるのかを考えておるのじゃないかな。

C その最左翼の極端に江青がいる。

B 王洪文というのはどういう男ですか。

中嶋 王洪文というのは、この間の十全大会のときに一躍クローズアップされた若い人物ですね。いろいろな説がありまして、毛沢東のめいの婿じゃないか、毛沢東一族じゃない

かという説もある。めいのほうはどうも姚文元だというほうが定説になりましたね。王洪文はむしろ江青夫人が若いときからサロンの一員としてかわいがってきた青年ではないかともみているんです。

A そういうところもどうして正確に情報が伝わらないんでしょうね。めいだろうとか、めいでないとか、どうもそういうところがおかしいですね。しかしこれからの中国は大変だと思えますね、だれが握っても。一体中国はどの方向に動いていくのか。

B 八億の民族だから統率するのは大変だよ。

A 中ソ戦争はないんでしょうね。

中嶋 中ソ戦争についてはいろいろなことがいわれましたけれども、珍宝島事件のような形でソ連が攻めるとも思えませんし……。ただ、まさに毛周死後、中国が非常に政治的に不安定になったときをソ連はねらっているのじゃないでしょうか。

A しかし、それは軍事力じゃなくて、やっぱりマルクス・レーニン主義を植えつけるという形をとっていくだろうと思いますね。

C それには多少戦術を用いるだろうと思いますよ。

D いまの大国——ソ連と、中国、アメリカ、この三つ——インドもありますけれども——の政治的な統御というものは

その国だけのカテゴリーで統御できなくなった。一元のようでも多元的な世界の国際政治の潮流の中で推進しないと、そこだけのブロック経済、そのブロックだけの統制力じゃできなくなったのじゃないか。そういう世界の潮流にどう合わせていくかというのが周恩来の中庸主義というか、ここで脱出しなけりゃならないというのでアメリカに接近したと思えますがね。しかし、あれだけ反米闘争を展開したのが「君子は豹変す」という言葉が中国にはあるけれども、ああ見事に豹変するのは、日本人はひっかかってできない。

B しかし、あれだけ人口が多いのだから、仮想敵国を立てなきゃ統治できないですよ。近代工業じゃないんだもの、まだ農業国家なんだから、それを統率するにはどうしても敵が必要なんだ。

C ソ連でもそういっています。

D 日本では固定視してしまいう危険性がある。中国ではいまも台湾に進攻するようなスローガンを書き張っている。しかし、そういう冒険主義はしない。ソ連でも中国でも、革命を苦勞して成し遂げた人たちというものは冒険主義は探らなくなる。日本の明治維新における伊藤博文でも山県有朋でも守備のほうに回って大事に守ったように思う。

A 中国はどっちへ変わるかわかりませんね。

C たとえば、有名な反ソ論文を書いたアマリクヤ、ソ

ルジュエニツインが最後に発表したソ連指導者あて書簡では、
両方とも口裏を合わせたように中ソ戦争必至とっている。そ
の場合に、攻めてくるのは中国だとし、その結果ソ連は負け
るといつているんです。

D そんなことはありませんよ。

C 私はソルジュエニツインは頭がおかしいと思っ
ているんだ。

D だから私はソルジュエニツインを高く評価しない。ロシ
アの密閉社会が生んだ奇型的な文化人であって、それ以上の
評価はできない。ただ、それと同時に、私は共産主義国家の
危険性は、イデオロギー的な権威主義と中央集権的な官僚主
義の中で自由と創意が圧殺されている。これに対する抵抗に
どう順応していくかというのが、これからのソ連なり中国の
課題だと思うよ。

B 中国なんていうのは西洋式のデモクラシーをやったら
崩壊するよ、いっぺんに。ソ連だって中国ほどじゃないけれ
ど、だんだんデモクラティックになっているかもしれないけれ
ども、まだそこまでの段階じゃないと思う。

C しかし、それは漸次なりつつありますよ。たとえばソ
連の場合は個人の独裁者はいまいないですね。

B スターリンのときのような圧制はないものね。

D だから、毛沢東のを見たって、表現と言葉は違うけれ

ども、スタイルは聖君子の王道主義だものね、君子という言
葉や王道という言葉は使わなくても。あなたが巧みに問題の
矛盾を突いているけれども、始皇帝と孔子というのを同一に
は見られないが、解釈のしようによっては、力を借りて力で
天下を統一したのが始皇帝であり、道義でもって天下を統一
しようと思ったが果せなかったのが孔子である。この二つの
織りなすもの、統一の意図を持って統一国家をつくりあげよ
うとした孔子、現実に力で統一国家をつくりあげた始皇帝と
いうものの古さを現実にいまナマでやっているのだから興味
しんしんだな。

これはギリシヤにおけるオリガルキーとデモクラシーの問
題。ギリシヤの古代国家における哲学の基礎というものは、
小さな国家、われわれが考えるようにエゴイズムの国家、奴
隸社会の基礎のうえに建っている国家——ポリス的な国家の
行き詰まりがギリシヤ社会の崩壊であり、その崩壊を見つめ
ながら青年とともに対話によって打開しようとしたのがソク
ラテスだった。やはり乱世に生まれた孔子に共通したものは、
いわゆるソフィスト的な技術じゃなくて、やはりフィロ
ソフィという形であった。文明史観と哲学によって、しかも
大衆——若い層との対話によって何かを求めようとした生き
方において、ソクラテスなり孔子なりと周恩来のやり方の中
には、試みとしては共通のものがあると思えますね。

しかし、きょうは私らの考え方——壁にぶつかって、中国の土べいに沿うて歩いてきた、万里の長城をさすっていったのじゃしょうがない。それをもっと上からのぞいてものの見方の角度を変えなけりゃいけない。それには、一種の推理方式、仮説であっても、そういう試みをしなれば見られないのじやないかと思つた。社会科学の中で、そういう文学やなんかの中で試みられている推理小説的な発想方法というのがこれからはやるかもしれないな。

A いや、社会科学で仮説家実験ということがあります。フラスコの中へ薬品を入れてやる実験じゃなくて、仮説を立ててそれが現実と合っているかどうかという実験のやり方があります。

C 仮説、仮説というけれども、この仮説は、数年前からあなたの話を聞いているけれども、大体みな当たっているんだね、幸か不幸か。そこで、最後に質問するのは、毛周以後の中国政治はどうなるか。ほんやりでいいです。

中嶋 やっぱり、二つの可能性を考えざるを得ないんですね。一つは、だれが出てきても中国自身ノーマライズされて、徐々に工業社会のほうに転換していく。外からもそういうインプットが入ってくる。中国自身は農業社会ですから、基本的には日本みたいにはならないと思ひますけれども、そういう形でともかくソ連がたどってきたような道をたどるの

ではないか。周恩来などは恐らくそれを考えているのではないかと思ひますね。対外的には平和共存路線。それがどんな人物であろうと、そういう方向しかないのではないか。ある意味で、この数年間の中国の転換はポイント・オブ・ノー・リターン——もう二度と戻れない道を中国自身、さいを投げたんだとみたいわけですね、私などは。だから、そういう可能性があると思うのです。それは以外にスムーズに行くかもしれませんが。その過程で、たとえば、毛沢東に対する評価、相対的な位置づけもできてくると思ひます、スターリン批判みたいな形でドラスティックな毛沢東批判はないにせよ。毛沢東の権威だけを押しつけるような形は修正されていくことも考えられますね。

もう一つは、そういう転換がうまくいかなくて、いまのような権力闘争が軍を中心として拡大していった場合、中国は天下大乱といっているけれども、中国自身が再び非常に大きな動乱を迎えるのじやないか。そのときは、ことによるとソ連は外からチェコ事件型の介入をするかもしれぬ。あるいは親ソ政権をつくらうとするかもしれぬ。あるいはモンゴルあたりで分断国家を統一しようとするかもしれぬ。チベットあたりにかかすかもしれぬ。新疆ウイグルあたりに自治共和国をつくるかもしれぬ。これになると、中国革命の成果は完全に失われて、再び大きな混乱社会になって、イ

インド型停滞を再び繰り返すかもしれないと思うのですね。

両方言うのと逃げ通みたいになりますけれども、そんなように考えざるを得ない。

C 第一を希望したいね。

A 第二にしてもインドみたいにはならないような気がする。もうちょっとよくなる。

B それは、農業革命をやって地主をなくしているからです。インドはまだ大地主がいます。その点はだいたいぶちがいますね。

E そうしますと、そういう国内要因から、台湾問題は割合に長期的になりますか。

中嶋 台湾問題は長期的になりますね、いずれにしても。

昭和四十九年七月二十六日

於参議院議員会館第六一九号室

国際問題 第六号

昭和四十九年八月二十五日印刷

昭和四十九年九月一日発行

発行人 戸叶 武

発行所 国際問題研究所

参議院議員会館第六一九号室